

敬老の日
9月15日(日)・16日(月)



長寿巻き

主任 奥原 歩久斗 厳選
長寿祈願 海老・長芋・鰻・鯛入り

1パック 1,580円 (税込)

 西田鮮魚店

☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

こんにちは、まだまだ残暑が厳しい日中が続いておりますが、稀利りも済み、周りの景色が段々と季節の変わり目を感じさせてくれます。今回も敬老の日で、すっかりお馴染みになった「長寿巻き」。中身も「し」に意味があり、食材選び、作り方ももちろんこだわっています。料理は手問ひまかければ美味しくなる料理人が良く言いますが、その通りなんです！実はこの長寿巻き「巻くのが一番難しく、そして何よりも時間がかかるんです。具材がたっぷり、巻くのが海苔ではなくて昆布で巻いているため、破れやすかったり、崩れやすかったり、形を綺麗にするため、ぎゅと力を入れるとシヤリが潰れてしまったりと、とにかく大変で、ゆくりと時間をかけて丁寧に巻き上げないとイケない。急いでいるからといって、早く巻こうとすると、せうかくのこだわった食材達が台無しになってしまうんです。そのもどかしさが私には、子育てに似た感覚に思えました。

子供が成長していく過程で、親にも色々乗り越える事が沢山あります。焦ってもいいし、悔しなくてもいいし、只々見守るしかないようなところも出てやれて悔しかったり、等思ひ出されます。ですが子供達はどうな事があるか、あてもゆくりと運しく、立派になつてくれました。立派な素材を持つて生まれてきてくれた子供達は、ゆくり焦らず立派になつていくんですね。短期な私もお陰さまで、少しですが成長したなと実感できる事ができました。

当店の商品も、鮮魚に買いに来られた皆様に迷惑の無いよう一生懸命販売し、その気持ちをお伝えに丁寧にお作りしていきます。

今日は成長された子供さんや、お孫さん達と一緒に過される方、予定が合わなくて過ごされない方もいらっしゃると思いますが、是非ご自分からも連絡を取り「元気にやっていますか」と話してみたいです。

それでは、皆さんのお越し心からお待ちしております。

西田鮮魚店 主任 奥原 歩久斗

『鮮コーポレーションの写真集Ⅱ シンセイアート』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



『年鑑 日本の広告写真 2022』というA4判の287ページにわたる分厚い写真集が送られてきました。しっかりと梱包されています。丁寧に解きました。本の真ん中あたりに付箋がつけられていました。椅子に腰かける間も惜しく、立ったまま開きました。

124ページ。そこに4枚の写真が……。
生きた生だこを右手にわしづかみにし、口を一字に結んだ私。7キロの大鯛をひっさげ、正面を見据える新鮮市場の越道さん。そして、蝶ネクタイに、これも巨大なたらば蟹を両手に持つ社長の龍一。さらに目をつむり両手に10キロのぶりを抱える私。この前まで、このチラシの裏に載せ、見ていただいた4枚の写真が目飛び込んできました。
「おお、いけとる！いけとる！」

ページを繰り返しました。
一流企業のポスターがずらり。キリンビール・キャノン・サントリー・資生堂・テレビ朝日・パルコ・ポルシェ・ポラ・ミキモト……。そして、そこに鮮コーポレーション。ポスターに写るモデルもタモリ・菅田将暉・五代目尾上菊之助・堤真一に満島ひかり・川口春奈、DNAの三浦監督も。そしてそこに私たち3人が……。

椅子にすわり、1ページずつじっくり目を通しました。
入選作品は2つの部門に分かれていて、宮角さんが受賞されたのは『A P Aアワード2022広告作品部門』。

131ページにその部門の『収録作家 広告作品部門』の一覧が掲載され、そこに『宮角孝雄』という名前がありました。そして、その次のページに『掲載クライアントリスト』として、『鮮コーポレーション(株)』と書かれています。錚々たる会社と一緒に。それがどうしたと言ってしまうほどののですが、やっぱり誇らしい。なんかうれしい。

まあ、すべて宮角さんの力なのですが。
そして、また、124ページに戻り、あらためて見なおします。すると右下に制作に携わった人の名前が記されているのに気づきました。

『フォトグラフィ 宮角孝雄・アートディレクター 赤星智子・デザイナー 津田吉男』と並んで、『プロダクション・シンセイアート(株)』と書かれています。

「こりゃあ、誠ちゃんに見せてやらにゃあ」
この写真集を制作してくれたのは、シンセイアートです。塩本会長に電話しました。「うちの写真集が賞をもらうたで」と告げると、「ああよかったのう」と他人事のような返事。「もうちょつと感動せえや」と、心の中でつぶやきながら、「見に来んか?」。会長になってからというもの、私と同じように時間を持って余している彼は、すぐに来ました。

そして、私は、机の上に置いていた本を、おもむろに手にとり彼に渡しました。その立派さに少し驚いた様子を見せながらも、「へっつ」と、無造作に本を開きました。そして、ページを繰るうち、「すごいのう」。

私と同じように、掲載されている作品の質の高さと印刷の出来栄えに感心している様子が見てとれました。

私は付箋をはさんでいるページを開けるように言いました。すると彼は写真を見て、「おお」とひと声。「誠ちゃん、右下」。促す私の言葉のままに、ページの右下に目をやり、「シンセイアート(株)」の名前を発見、思わず頬がゆるみました。それはそうです。この写真家の登竜門といわれる『A P Aアワード』で栄えある入賞を果たした写真集の制作の一端を担った印刷会社なのです。名譽なことであり、「いい仕事してますね」と称えられたことに他ならないのですから。

彼は、すぐさま私に言いました。「この本、買える?」「もちろんよ」。こうして一冊4200円+税の、その本はシンセイアートに届けられました。

塩本会長にとってこの入賞は大きな意味をもっているとは思いますが。ここに、彼の理想の一端があると思うから。彼が目指す会社の形はその社名に込められています。『アート』という言葉に。

彼は大学を出て大阪の印刷会社で働いていました。24才の時、「父危篤」の知らせを受け、急ぎ庄原に帰って来ました。しかし、案に相違して元気なお父さんに迎えられるのです。まるで落語にでも出てくるような話ですが、唾然としながらも、そんな嘘をついてでも息子に帰ってきてほしいと願うお父さんの気持ちを察し、帰ることを決めました。

あのころの社名は『庄原印刷』でした。
それから年を重ね、時代が移り情報化の波に洗われ激しく変化する社会の中で、旧態然とした会社ではやっていけないと危機感を抱いた彼は思い切った行動に出ます。

38才のとき、彼が主導して県北の印刷会社3社の合併を図り、新しい会社を興し、庄原の工業団地に新社屋を建てたのです。驚きました。「やるのお、誠ちゃん」。

そのとき命名したのが『シンセイアート』。
印刷物を刷るといっただけにとどまらず、クリエイティブな会社に生まれ変わるんだという彼の意気込みを感じました。私が、父から引き継いだ『西田鮮魚店』を『鮮コーポレーション』とした時も同じような思いがありました。

そして今回、宮角さんと仕事をすること、私はプロフェッショナルと呼ばれる人の妥協を許さぬ姿に面喰いながらもクリエイティブであることの面白さに気づかされ、大いに刺激を受けました。それはシンセイアートのスタッフも同じではなかったかと思えます。

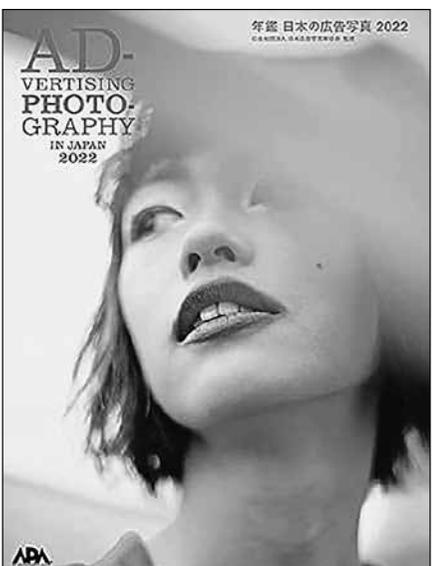
最初の打ち合わせで、この写真集はモノクロにしたいと宮角さんから提案がありました。「いいですね」と私はすぐに同意しました。

毎週のこのチラシも基本はモノクロです。一番の理由は、なんととっても印刷代が安くなるからです。広告商品によつては、モノクロの方が、存在感があることが多いし、それに、よその広告はカラーが多いから、モノクロの方が目立ちます。だから、刺身や寿司なんかはカラーですが、できるだけモノクロにします。で、そんな浅はかといえれば浅はかな考えで、宮角さんの提案にすぐのりました。

ところが、ところが、私もシンセイアートもモノクロという色の奥の深さにたじろぐことになるのです。

そこには、妥協を許さぬ『芸術家 宮角孝雄』の厳しい姿がありました。

(続く)



年鑑 日本の広告写真 2022